



The History of Modern Astronomy in Japan

小暮智一 著

Springer B5判変形 295頁, 洋書 定価約20,000円

研究資料

お薦め度

5

☆☆☆☆☆

これまでの日本の天文学の発展を振り返る興味深い新たな本が出版された。小暮智一氏による *The History of Modern Astronomy in Japan* (日本現代天文学史) である。江戸時代から現代まで(執筆時の状況を反映して2010年まで)の、実に400年にわたる日本での天文学発展の歴史が多くの写真とともにまとめられている。偶然にも、2009年の世界天文年はガリレオ・ガリレイの天体観測から400年を記念したものだだったが、およそその間の日本での天文学の歴史がレビューされていることになる。氏は2015年に京都大学出版会より『現代天文学史: 天体物理学の源流と開拓者たち』を著している。その本にある「日本における天体物理学の黎明」という章と本書の内容が重なるところもあるものの、もっと包括的で、資料や掘り下げの幅の広さと深さがまったく違うものになっている。また、これより少し前の2008年に、日本天文学会100周年記念事業の一環として恒星社厚生閣より『日本の天文学の百年』が出版されている。併せて読むと、日本の天文学の歴史が立体的に見えるだろう。

本書はSpringer社より *Historical & Cultural Astronomy* というテーマで出版されたシリーズの一冊である。2017年からこのテーマで単行本のシリーズが刊行され、2022年5月現在、29冊が刊行されている。本書はその24冊目にあたり、他の類書に比べ、天文学に貢献のあった研究者に焦点を当てつつ書き進められているのが特徴である。江戸時代の山片蟠桃、川本幸民から現代ま

で、肖像の写真とともに三十数名が特に取り上げられている。江戸時代から大正時代までは比較的軽く触れ、昭和時代の戦前は東京、京都、仙台の三拠点でまとめ、戦後は観測機器の発達と天体物理学の発展に分けてまとめられている。戦後の日本の天文学の大きな発展は、日本の経済成長の結果としても理解できることが第6.1章に記されている。本書は英文で書かれているが、人名をはじめとして固有名詞の多くに日本語表記が付記され、日本語を母語とする者にも読みやすく、また、理解しやすいものとなっている。さらに、江戸時代の章から天文教育普及の章までの8つの章それぞれに豊富な参考文献リストが付けられ、世界の日本天文学史研究者のためのゲートウェイになるだろう。

本書を含め、日本の天文学発展と歴史をまとめた本であまり触れられていないものに、若手の強さや、天文天体物理若手の会の活躍がある。こちらは、100年には満たないが、半世紀以上の歴史があると聞いている。このような組織が自主運営され、しかも教育普及を含めて社会との関係を深く議論し、所属をはじめ、さまざまな壁を越え、磨き合っていることは、日本の天文学コミュニティが誇りにすべきことのひとつだと思われる。これは次の世代が振り返ってまとめてくれるだろう。

富田晃彦 (和歌山大学)